

直に反応し、表情は、自由で、素朴で、そのどれもが、自らの心の原因発となる。心の原因は、そのまま空間を安心させて変化に乗せ、時を癒して、時を繋ぐ。その生命の仕事をする自分自身に、人は笑顔になる。(by 無有 4/13 2018)

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

人間（1）

1.心のままに生きる人は、あたり前に自分に正直でいて、約束も自分とする。それは、気づきを不要とする、本来の生き方。そこに、停滞の原因は無い。

そのことが違和感となる人は、気づきを趣味とし、心のままに生きようとするその姿勢(行為)が好きである。それは、心の世界の重石となる、個のままの思考。そこに、心ある原因は無い。

自分にではなく、他者に対して正直でいようとする人は、自分が正直であると人に思われたい歪な感情で、偽りの人生を生きる。そこに在るのは、心の嘘。そうであることを全く自覚できない程、その嘘は安定する。

自分に正直でいることが難しい人は、どれだけ言い訳をしても、その生き方全てが嘘である。それだけ恐ろしい本性を秘めていることを意味するそれは、暴力的な未熟さの形と言える。

自分に正直でいると、自分の本当の姿を自ずと知り得ることになる。自己探求も覚醒も要らないそれは、人間であれば誰もが普通とすべき、生の在り様。正直さの始まりが、外であるはずがない。

2.人の不安に敏感に反応して自らも不安になることはあって

も、不安の原因からは常に遠くに居る、元々不安を知らない人。彼らは、不安発の選択・行動の世界から離れ、そうではないありのままの自分を普通に、理由の要らない安心の時を生きる。そこでは、不安がそのままではいることはない。

その姿がどうにも違和感でしかない、自分が不安でいることも分からない、不安をあたり前とする(不安そのものの)人。彼らは、何をするにしても、その無自覚の不安を燃料に判断し、生み出される不安発の現実を通して、更なる不安な状況を引き寄せる。そこでは、不安の原因だけが生きる力となる。

中庸という、生きる基本のその元となる原因のところから観る時、生きる自由と人権が尊重される世でいつも不安の中に居るという人は、それだけ、狡賢さを備えているということになる。自らの中の人一倍狡猾で悪質なその感情(不安)が武器にはなりにくい時代環境の中で、不安になることで、人の気を惹き、不安からなる辛さや苦しさを無意識に演出しつつ、人の人生に負荷をかける。人は、彼(彼女)の思い通りになる。

人間経験での不安の大元となる、命の危険や力による人生への支配・抑圧が無いこの現代、不安で居続けられることは、それ自体が欺瞞(嘘つき)と捉えて良い。そんな人は、時代環境が違えば、平気で人の命を奪える程の悪辣な(強靱な)不安と怯えを内に潜める。その本質が、そのような状態を支える。

不安の理由が、意思表示することはない。不安の材料が、勝手に増えることもない。人間は、そこに在る不安の原因を浄

は攻撃的になり、そうでなければ、嘘の表情を作る。その時の嘘に、笑顔や柔和な姿が上手く利用される。

形無き原因からではない、(所有欲や優越心と繋がる)物や形を通しての結果発の安心を抛りどころとする人は、感情の質が不自然で、重く、流れない(回転しない)ものであるため、そのままだと、表情は、不遜で冷たく、不機嫌になる。そのことによる不利・不遇を防ぐために、彼(彼女)は、人前ではいつも笑顔になり、穏やかで、淑やかな印象づくりをする。笑顔を絶やさずに居られるというのは、不気味さでしかない。

人間は、心の様子が人間らしく普通である時、表情は、そうであることも分からないぐらい、柔らかく、自然なものになり、当然そのことで、不穏な状況や関係性が生み出されることはない。事の起こりは、いつもその原因から。理由の要らない安心と喜びが自然と生まれる普通の人のその心の風景(原因)に、争い事や不安・不健全な状況が引き寄せられることはない。

笑顔でいることの大切さを表現しようとする人は、そうであることの燃料となる不平と恐怖(怯弱)の感情を内に潜め、その自覚もなく、不公正で不健康な風景を作り出していく。朗らかで優しい表情や仕草を心がける人は、その実、そうではない本性を隠し持ち、その嘘の言動の下地となる秘めた非人間性で、人の暮らしに、無くてもいい現実を生み出していく。

嬉しいから、人は笑顔になる。そうでなくても、人は不機嫌にはならない。人は、心ある生き方を普通とするから、縁する空間(人、出来事 etc.)への違和感やそれとの融合の質に正

ば、それは、未来への責任感覚を普通とする、その真剣な在り様となる。初めにその品性が在り、その人の全てを通して、それは自然と伝わる。しかしながら、それは普通。人間が人間らしく自然に責任を生きる時、その姿を未来は嬉しい。そこに在る原因は、どこまで行っても、生命としての本来であり、その質は、品性という言葉の次元を包み込む、地球感覚の品性である。否定感情(不安、差別、支配 etc.)とは縁遠い世では、誰もがそれを普通とする。

品性や品格(品位)を意識する時、自らの中の非人間性を自覚する。人間は、自然と伝わるものが交流の基本であるから、不自然に何かを伝えようとする次元からは自由でいる自分を生きる。その時、責任感覚の無い形ばかりの品性は、ガラクタの代表となる。人間は、人間の世界特有の品性の次元を知らない。

6.人間は、嬉しいと、笑顔になる。笑顔になると、嬉しくなるわけではない。人間は、心が平穏だと、柔和な表情になる。柔和な表情を心がければ、心が平穏になるというわけではない。

人の内側に生じる感情は、そのまま表情や仕草となって表に出て、心身の状態にも様々に影響を及ぼす。それが他や過去を意識することからではない、素朴な安心のそれである時、感情は、その人そのものの性質となり、優しさや思いやりを普通とする人間らしさのその原因となる。そうではない不安や嫉妬の絡み合う感情である時、状況(環境)が許せば、その姿勢

化する経験を普通とする中で、人間らしく生きることを覚える。不安がいつまでも不安であることの原因は、その人間らしさへの拒否である。

3.「歴史の芯」の中で、問題事や病気の原因に細かく触れ、どこまでも深くそれを浄化し得る機会を創り出してきたが、それは、この数千年間の歴史的事実のその形無き負の原因(本質)がそのままであったために、その必要性が形となったものである。今、これまでの歴史を挟むようにして、一万数千年前の風景のその原因をここに招き、それを未来へと繋ごうとするこの時、改めて、人間の病気との関わりの実態を知る。

人が普通に健康であっては欲しくない非生命的な原因が、未だかなりの力を持つ現代において、人は、やむを得ないこととして(当然誰もががかるものとして)病気の存在を捉えているが、それは、無くて良かったところにわざわざ作られたものであり、その中身は嘘である。この人間社会に在るのは、物や形(人の無意識の意思や本性)を通して人を病気にさせようとする意思のその暗躍する姿であり、その負の原因との関わりを否応無く持たされた挙句、人は、いつのまにか心身に不調を抱え、病気になるのである。

病気を前提とはしない生き方が普通となると、元々それは嘘であるから、当然のこととして、病気と縁遠い人が増え、病気は、彼らの違和感となってその負の力を無くす。実に単純な話である。病気を意識しないで済む生活が馴染むと、当然の

結果として、病気の原因と繋がる物や形との接点が無くなり、人を病気にさせようとする不穏な意思からも離れることになる。あたり前のことである。(そのための基本は、「歴史の芯」「仏陀の心」の中に在る)

そこに病気という事実があるために、それに対処するという生き方が必要とされるが、その原因を考え、そして更なるその原因を考えていけば、病気は無くてもいいものであるということ、人は理解する。そして、徐々に、確実に、その病気の存在意義を無くさせていく。それを普通とするのが人間であり、その普通を拒もうとする存在が、病気の(病気を生み出す)原因を担っていると捉えてよい。

この世は、人を病気にさせる人と、自らも病気になってそれを利用する(人を困らせようとする)人が居るが、その存在たちの影響で病気になったとしても、そのまま病気でい続けてしまうことはない。嘘に付き合わされて、無くてもいいはずの病気の人間を生きるか。その嘘の原因を外して、普通に人間を生きるか。もちろん、人の姿(身体)は、後者の生き方をするように出来ている。(じゃあ、先天性の病気はどうなるの?となる。「歴史の芯」で本体の意思世界(次元)のことを感得すれば、そこにも、そうである原因が在ることを知る)

哀しい事実だが、この現代の社会環境は、病気にさせたい人と、病気になりたい人との妙な共同作業で成り立っている。そこに取り込まれないためにも、彼らが好む(自然界が力を無くす)LED 照明を外し、彼らが嫌がる(細胞が喜ぶ)全粒穀物

げなく人を生かし、その風景が、次へと連なり、繋がっていく。

その人間本来の普通が尽く遠ざけられ、忌み嫌われる時を経て、人間の生の質はどこまでも低下することになるのだが、そのための材料として狡賢く人の世に具体化された概念が、品性であり、品格(品位)である。品性の本質は、全くそうではない状態を覆い隠すための、偽装・偽善である。昔から、力ある立場の存在は、それを好き勝手に弄び、人との差を愉しむ際の、その要素(味付け)に上手く使う。

勞せず力を手に出来る(支配する側でいられる)体制を整えた、心を持たない存在たちが、お遊戯感覚で始めた、見た目からなる品性・品格。現代でも、危うい本性を備える人間によってそれは利用され、裏表のある人生にしがみついた人間によって、それは支えられる。品性の有る無し判断・理解は、実に恐ろしい病みの感覚。秘めた残忍さを見せなくさせるための道具として、そんな人がその気もなく身に付けてしまう品性・品格の類は、心をごまかし、人を騙す、格好の手段となる。

人の世に、品性のようなものがあるとすれば、それは、現代人が認識するそれとは次元の異なるものと捉える。形から始まる形式が人の思考に深く絡み付く世では、見た目優先の中身の無い人生が横行する。そこでは、自然に伝わるものが執拗に隠され(無視され)、作為的に伝えたいものだけで、人は生を生きる。そのことで、存在感を手にする品性。それは、嘘の人生の証となる姿でもある。

人間本来に品性という言葉を取って重ね合わせるとすれ

ころに居る。知識ばかりが増えると、体験的理解の次元が遠のき、何をしても、どこに行くにしても、その気もなく意味も無く考えるという不気味さをあたり前としてしまう。心がそのまま言葉になる人間本来の風景に、知識が、言葉による表現や理解の元になることはない。

考えてばかりの生活をしていけば、人と話をする時、必然的に考えて話をする。考えることで、未消化の感情の記憶を溜め込めば、その分考える(考えてしまう)ための燃料は増大し、誰と居ても、考えて話をする。考えて話をして、本心をその気もなく隠し続けるというのは、内心は、いつも不安で一杯であるということ。そこから自由になるために、考えずに話をする。そのまま想いを言葉にする。いつしか、本心が、理由の要らない喜びの原因と重なれば、何を話しても、どんな言葉を使っても、ありのままの本来は元気になる。

人間は、内も外も同じ。同じだから、人間は、人間でいられる。言葉(会話)は、その普通を支える、気の良い仲間のような存在、そして生命。心のままの言葉と一緒に、心を生きる。それは、人間の普通の姿。

5.人間は、他者を自分のことのように思い、他との隔たりも無く、共に居る空間を、柔らかで、温かなものにする心の働きを普通とする。人の住む世界では、それだけで他は何も要らず、ただそのための生き方が自然と育まれ、共に成長する。何をするわけでもなく、何気に手にすること、形にすることが、さり

食を普通とする。そこから、人間を再スタートさせる。

4.物事の本質というのは、その中に在る、その原因の性質のことである。自らの生きる原因が、自然界が喜ぶ中庸の次元を普通とする時、物事の本質は、どこまでも自由に、容易に観察し得ることになる。

どんな人も、その原因深くで自然界のそれと繋がる、存在の本質。その自然界との繋がりを普通に融合を高め、その質を成長させることで、人は自然に変化に乗り、一生命としての意思を躍動させることになる。その意識もなく支え合う自然界との融合は、人が人として生きる上での、その大切な原因となる。

その様の観察は、人間にとってとても重要なことであるが、特別にそうであろうとすることはなく、ただ発する言葉、向かう場所、関わる事のその原因が、自然界を安心させるものであれば、それで OK である。難しいことは何も無い。不安で物を作らず(事を動かさず)、生み出される物や形(関わる人や空間)が自然界を悲しませなければ、その人の責任感覚は、ムリ無く自然で力強いものになる。

文字(本)を書き、歌を歌い(作曲し)、食品を製造し、人の脳を刺激する。事を進め、人を動かし、形を作り、空間に影響を及ぼす。そのどこにも、自然界には無い滞りや衝突の性質は在ってはならず、自然界が経験しなくてもいい不安や差別の感情が、それらの材料としてそこに在ることも考えられない。

自然界は、形あるものより先に、その元となる形無き原因の性質に反応する。

書物でも歌でも、学びでも娯楽でも(スポーツでも文化でも)、その手前の原因のところには不安や隔たりの感情が在れば、廻り回ってその負の影響は、限り無いものになる。そのことを、自然界は決して望まず、そのために停滞する(退化する)人間の世界のその本質(原因)に、辛さを覚える。

作品は、いつの時代も、在るべき姿を繋ぐためと、在ってはならない現実へのその変化の材料(原因)である。それは、中庸の世界発の、シンプルな真実の形。自然界の安心そのもののその原因は、何があっても、生命の仕事をし続ける。

5. 互いの、その手前の形無き想いがその時を引き寄せた、ある人との会話。それだけで充分である。その大切さが自然と共有されれば、後(内容)はどんなでもいい。会話は、共に居ることで動き、変化する、その時ならではの新たな原因の営み。言葉は、何でも、そのための少しの味付け。その時の言葉は、文字の域には収まらない。

人は、縁する人との空間で言葉を発する時、言葉が無くても通じ合えた遠い昔のその形無き交流の原因の記憶にその必要性を観察してもらいつつ、その時々々の正直な感覚に、さらにと何でもない言葉を付き合わせる。そして、想いを重ね合わせ、互いの普通の質を力強く広がるものにする。そこでは、言葉が力を持つ話題も、言葉が先行する知識型の内容も、無縁

然なプロセスを押さえ、言葉を選び、考えながら話をする人は、そう思っていると思われたい(思わせたい)その実思っていないことを言葉にすることを常とする。それは、言葉を盾にして、嘘の自分を守ろうとする怯えの形。人は、彼(彼女)の言葉に気を取られ、気づけば、頭を不要に働かされ、心(感性)を抑え込まれる。

考えて話をするというのは、時にその必要性に付き合わざるを得ないこともあるが、基本的には無くてもいいものである。そうであるべきこと(理由)が力を持ち、それを普通としている姿があれば、その人は、いつも過去を引っ張り、結果を生きる、言葉だけの人間ということになる。物事の原因となって連繋の仕事をするはずの言葉は、考えて話をする人の脳の中で、重く動きの無い滞りを生み出す負の原因となる。

考えて変わる(変われる)ことは、変わるべきことへの抵抗を少しだけ薄めるレベルのもので、なぜその抵抗が生じ、なぜそれまでそうであったかのその原因を変える力にはなれない。つまり、考えて話すということから自由になれない人というのは、変化とは無縁のその無意識の意思(本性)で、人の変化を止め、非生命的に事を扱うのを好むということ。そこでは、言葉から始まり、言葉で終わるといふ、言葉だけの話を得意とする人間が妙な存在感を持つ。

話すための知識を溜め込むのが好きな人は、当然、それを不要とする心の自由は経験できず、そうして本心を偽る分、心身の変化・成長に繋がる原因のままの交流とは、縁遠いと

の原因は入り込めない。

自然界も嬉しい、人間の自然な生き方。そこでは、決まり事も、その生き方を守り、支え合う、人間としての約束事。いつもそれは、自然界に見守られ、応援され、共に協力し合う。それは、決まり事のように、そうではない、人の普通の形。不自然さも不自由さも無いから、自然界同様、人の世に、困り事は生まれにくい。それは、人間が人間でいる空間での基本形。地球も、それを嬉しい。

自然界が安心できる人間の住む世界では、大切なことがあたり前に大切にされる風景が普通に在るので、決まり事がとても少ない。それでいて、問題事は見当たらない(当然だが…)。人は、その意識もなく、協力し合い、支え合い、生かし合う。

決まり事が多い人間社会は、人間が住む世界とは言えない。決まり事を作りたがる問題事大好き人間は、無人島行きである。そんな人間としての普通を普通とし、生きる原因を、自然なものにする。自然界はいつも、人間たちの姿をじっと観ている。

4. 考えながら話をする人の姿というのは、本心を偽る自分に全く無自覚な程、その状態が普通になっていることの現れであり、そんな人が大切にできるキレイ事や体裁の陰で、人の世は、人知れず不穏なものになっていく。

思っていることは、自然と言葉になろうとするもの。その自

である。

話をするための知識は、(原因同士が呼応し合う)心ある風景では一切不要であり、ふと何気に触れ、出会った(引き寄せた)知識のその原因となる部分が自分の中で消化される中で、それへの働きかけのために、知識という名の原因が言葉になる。人と人が共に居る空間を次なる時の原因とする時、そこに知識欲の次元は近づけない。その原因(心)が外される時、それが言葉になってもならなくても、不平・不満や愚痴・悪口の類の感情が動き出す。

言葉は、その人の原因の性質の具体版。その姿(感じ)がどんなであれ、内に秘められた感情は容易にそれに乗り、正直にその反映となる仕事をする。それが危うい人ほど、知識だけで通用する話を好み、巧みな話術まで駆使して、支配の道具として言葉を利用する。その手前に心ある原因を持たない人の世界では、話をすることからでしか始まらない非生命的な会話が普通となる。

話は、形無き原因の融合を基に為される、自然な生命活動のひとつの形。伝えることもなく、大切なことは伝わるから、話す度にその原因の質は成長する。それは、その原因のところで自然界の生命たちとも融合し、何も無くても全てがある本来の普通世界を支え続ける。今、全ての活字(書物)と情報が消滅したとしても、それは、いつもと変わりなく、連繋の意思(仕事)を担い続ける。

6.どんな時も、意識する対象のその原因と自分のそれとの間である性質の融合が始まることを考えれば、何でもかんでも好きにものを考え、自由に意識(思考)を働かせることが、実に不自然であるかを人は理解する。物を手にしても、文章を読んでも、その作り手や書き手の中に潜むそれまでの原因の性質が、経験の外側でいくらでも仕事をする、常に原因でい続ける生命世界の普通。人間は、人間独自の思考世界をどれだけ成長・発展させても、その存在の本質となる一生命としての質(原因)を変えることは出来ない。

何をするにしても、どこに行くにしても、そこにどんな自分が居て、どんな性質の原因がそれを必要としているか。その意識もなくそれが大切にされていることを、人間を生きていると言う。そうでない時の姿は、(生命を生きる)人としての原因が備わらない、形ばかりの嘘の人間時間ということになる。

人間らしさが普通である時、自らの原因は変化そのものとなり、自由に時空を透過しつつ、現実(環境)の原因を調整・浄化するという、多次元的な生命の仕事あたり前とする。そこには、結果に居続ける形(形式)も、結果にとらわれる思考も、全く存在しない。人間本来の自然な在り様に滞りを生み出すそれらは、生きる原因の非生命化(非人間化)を良しとする、退化の象徴。この地球に生きる人間が、地球が安心するありのままの人間であろうとする時、人間だけに通用する(通用させる)結果の世界が力を持つことはない。

そこから自ずと見えてくる、人間にとって有ってはならない、

える非生命的な感情を普通とし、厳しさや大変さを美德としてしまう程、生きる質を低下させる。つまり、嘘の人生である。

その嘘の人生(人間社会)での全てから自由になれば、生きることが、どれ程の喜びかが分かる。そこに悲しみは近寄れない。不安も不幸も、その意味を知らない。その時の、その普通を、人間を生きていると言う。

3.人間が住む空間である種の決まり事が作られる時、それが自然界に生きる生命たちに負担をかけるものでなければ、人々の暮らしから、健康と平和の原因が失われることはない。

人が病気になるのは、生まれる前からそこに在る決まり事が、不自然で不健全なものであることを意味し、そのために、健康・健全の原因は活躍出来ず、人は、その気もなく病気の原因を蓄積させることになる。

人と人が争うのは、生まれる前からそこに在る決まり事が、不自由で不調和なものであることを意味し、そのために、平和と友愛の原因は身動き出来ず、人は、いつのまにか、争い事の原因を内に潜めることになる。

自然界は、病むことを知らず、動植物たちは皆、自然な在り様を基本に、調和そのものを生きる。その自然界が困らない決まり事を生み出す思考は、心身の健康を安定させ、健全な人間生活のその基礎を支える。自然界の自然な姿に負担をかけない意識は、そのままそれとの融合が重ねられていて、自らも調和を普通に自然であるということ。そこに、病気や争い

2.人間が辛くなるのは、調和ある自然界(空間)のその原因となる一生命ではられない自分を感じる時で、その他は無い。人間が嬉しいのは、太陽のような全てを生かす存在としての生をこの地球で表現できていることで、それ以外は無。それを知り、この地球自然界で異常な変化を遂げた人間世界での、人間特有の悲しみと喜びの本質を見る。人間本来は、悲しみを知らず、喜びも、その理由を知らない。

そのことを忘れて生きているから、悲しみや辛さがある状況で身に起こるわけで、初めからそこ(本来)に居る自分を知れば、それらへの違和感からそこ(不安)を離れ、それら全てが無くてもいいものであることを知る。

そのことは、人間が成長する上で不可欠なシンプルな理解であるのだが、人は、自らの本質を知ることが怖れ、感性を鈍化させつつ、嘘の人間を生きる。不安の裏返しの安心を求め、それが手に出来れば幸せを感じ、そうでなければ悲しみを抱くというその身勝手さは、そのまま悲しみや辛さを生み出す原因となって、歪な世を支える。

自然界の自然な姿が自分の安心となり、喜びとなるような人たちの住む世界では、ただ人間を生きる(生きられる)ことの喜びから、生が始まる。人間が人間でいるその普通の世に、悲しみや辛さが生み出される原因は無い。

生きる原因が自然界のそれからかけ離れた時、人間は、理由の要らない安心を忘れ、無自覚に不安を慢性化させる。そして、喜びと悲しみ、安心と不安という、二者択一的思考で扱

思考型の歪な姿。その代表となるのが、論理的思考という、原因(心)を恐れる姿勢と、科学的根拠という、怯えの裏返しの概念である。

物事の原因を無視し、その本質からなる動きを阻む感情がその燃料となる、論理的という姿。人間は、それを普通とはしない。変化し続ける原因の世界のその普通の動きを執拗に抑え込む力が形となった、科学的根拠という概念。人間本来の思考は、それを無縁とする。人は、自然界の原因と融合し得る健全な感性を無くすと(持ち合わせてないと)、個人的な経験枠を抛りどころとする、思考型の論理と科学に走る(頼る)。

結果から始まれば、争いも病気も無い原因は、力無くして、遠のいていく。過去にしがみ付けば、初めから、停滞と衝突を生み出す負の原因が動く。その人としての基本が外された上で成り立つ、論理的思考と科学的根拠。それらに付き合う時間は、人間には無い。

(論理的思考を普通とする人は、自分がすぎる科学的根拠を好き勝手に利用する反面、それ自体に責任を取ることはない。科学的根拠という概念(権威)に思考を働かせる人ほど、自らの責任(心)の無さを正当化するために、それを重宝する。その世界で妙な好感を持ち得る、思慮深さも、思索好きも、真に生きることを放棄した人の嘘の姿である)

7.人が何かに向かう時、そこにはすでに向かわされる状況設定が在り、多くの場合、人の、生命としてのその生きる姿勢

(原因)が、そのことで成長することはない。向かうというのは、向かわなくても良いことに気づけない人の、個人的な自己満足の世界である。自然界に生かされる、人間という人の世では、向かわなくても為し得ることの変化・成長とその共有だけで、平和も健康も普通となる。

人は、時に、生きるため、自由を手にするために、何かに向かうこともあるが、それは、人間の生命本来からなる自然な方向性であり、そこでは、個であって全体、みんなにとっての自分という、変化そのものの原因(心)がその原動力となる。そして、その時を経て、生きる基本形は更新され、それまでのことは、その必要性から外れる。向かわなくてもいい時を普通とするために、そうではない(なかった)時のその原因の浄化に、心身は、自然な感覚で動き出す(向かう)ことがある。

誰もが友愛と調和を普通に、平和と健康を生きることは、人間にとって何より大切にされるテーマであるが、なぜか人間であっても、それを避け続ける存在が居る。彼らは、人を、ある特定の何かに向かわせ、他を隔てる感情を経験させて、それを人の思考(精神)に染み込ませていく。嫉妬心を煽り、優越と差別をしつこく内に育ませ(潜めさせ)、建て前や体裁で繕える嘘の人生を一般化させる。そして、人間が歩むべく一生命としての原因の成長を潰す。

何かに向かわざるを得ない状況があるとすれば、その多くは、人間の成長とは無縁の、意味のあるように仕組まれた、意味の無いもの。それに意味付けすることでしか身を守れ(保て)

うとする結果優先の価値観が力を持ち、感情も忙しくなる。そして人は、本来であれば無くてもいい経験を主に人生を過ごすことになる。

難しさの中、人が思考を忙しくさせる時、そこには、外へと広がり繋がる健康や調和の原因は無く、自然界が望む、理由の要らない平和の要素も無視されてしまう。いつしか、その風景では、個人の都合優先の感情が事を動かす原動力となり、その重たい原因は、差別や優越といった、人間が持ち得なくてもいいそれらの意識が正当化されるという、歪な人間空間を誕生させる。それも、難しさの原因がずっと放って置かれたためのもの。人間は、複雑に頭を使わされる経験の中で、生きる上で最も重要な、人として在るべき原因を育む責任を無くしてしまう。

人間は、形を創る形無き心がありのままであると、どんな難しさも違和感となる。忙しさも複雑さも、その原因の危うさに反応するので、それをそのままにはせず(不要にそれに関わらず)、感覚的対応を主に心を活躍させる。人間が人間を普通に生きる時、難しさは居場所を無くす。

心無い人間時間を普通とする人は、心ある原因とは無縁であるため、頭をやたら使う難しさを愉しみ、複雑な問題事への対処に妙な喜びを覚える。そして、縁ある空間や環境への配慮を無くし、人間であることを忘れる。難しさは、心の無さの具現化でもある。人間は、それ関わりの世界で、どこまでも人間らしさを削っていく。

人間（3）

1. 難しくさせられてしまっていることは有っても、難しいことはどこにも無い。仮に、そこにそれが有るとすれば、それは難しくなるまで放って置かれたためのもので、そうでなければ、無かったことである。その理由となる存在によって事の原因が動かなければ、それが難しくなる流れに人は巻き込まれ、難しさが普通となる異常さを人は経験する。難しさの奥深くには、凝り固められた無責任の原因が在る。

健全も健康も、調和も友愛も、それらの原因を持ち合わせない存在が生み出そうとする、不健全で、争い事の絶えない世への働きかけの結果生まれたもので、元々は無くてもいい概念(言葉)である。人としての在り様が普通に健全・健康である時、そこには事を複雑にさせる事柄は存在せず、調和も友愛も、誰もそうであることを知らずに、それそのものとなる。世に存在する言葉や表現の多くは、普通に育まれ、成長すべき(されるべき)ことを嫌悪する存在が、そうであるように仕組んだものと思って良い。難しさ(複雑さ)は、停滞と衝突の別の形である。

難しさの原因が変わらず、そのままそのことが普通となる時、人は、要らない思考の働きを強いられ、体験の伴わない形ばかりの知識(情報、表現)を際限無く取り込むことになる。複雑に絡み合う原因がそこで存在感を持つと、それをどうにかしよ

なかつた経験は、その無意味さに力を与え、その背景に在る非人間的な思惑を支える。そうでしかなかった時の連なりは、その気もなく自他の変化を止め、争いや衝突、病気や不健全さの下地を固めることになる。

人は、ある何かに懸命に向かい、その結果、そこには向かわなくても良かったということに気づかされ、その機会を、貴い理解として感謝する、という愚かな人生を重ねる。人は、向かう場所を変えつつ、向かうことを続け、その後、そのどれも個の欲の現れであったことに反省し、心から謙虚になる、という無くてもいい偽りの経験を大切にする。

向かう人生は、生きる価値そのものを無くす(見失う)ことから始まる、人間には相応しくない、至極不自然な姿。それは、心の無さをごまかし、嘘の原因で真の普通の息吹を封じ込める、非生命的意思の具体化。人間は、自分に正直でいれば、時間をムダに使うこともなくなり、向かわずして出来ること、ただそのまま表現し得ることの、その質を高める自分を活躍させる。そのために必要なことは全て有ることを知り、ただそれを自由に、思うままに使い、形にすることの意味を実践する。

向かうことで手にする本来の平和や健康などどこにも存在しないということを決して人に気づかせないために、それが(その類の価値観が)存在し得る意味は、執拗に力を持つ。その材料となる、いくつもの、期間及び地域限定の、向かうこと。人が、向かうことを止めた時、その時初めて、人は、一生命としての人間の生を生き始める。そして、みんなの平和と健康の

時を近くに引き寄せ、自らが、それらの原因となる。それが、人間である。そのことを普通に、人間らしく人間でいることが、人間の姿である。

(そこに善悪が無ければ、それは、向かっているようでも向かっているわけではない、大切な原因の時となる。他を隔てる感情や優越心(嫉妬、独占、怖れ)がそこに無ければ、向かうこともなく向かうところで、みんなに繋がる貴い経験を創る)

8. ‘人のために’という言葉がある。がしかし、それは、人の世には無くてもいい言葉である。その言葉のために、人は、嘘を本当として生きることを覚える。

人のためになる自分であることは、ごく普通のあたり前のことで、そうではない性質の自分を、人間は生きることが出来ない。普通であるから、そうであろうとすることも、そうなりたいと思うことも一切不要となり、ただありのままに生きていることで、人は、互いに生かされ、支え合う空間を共に生きる。そのことへの違和感は、異常となる。

‘人のために’という言葉が力を持つ世界があるとすれば、それは、そこに、異常を普通とする本心を隠しつつ、嘘を本当として狡く生きる人たちが居ることを意味する。人のためとなる原因(心)を持たない人たちが、それをごまかすために意識する、人のために生きる姿。人としての普通が力を無くした世では、そうってしまったその理由となる負の性質(本性)を堅固にする人間たちによる、人には無縁であるはずの、偽善と

こでの、思うことで良しとする正しさの次元は、LED の負の原因(影響力)を巧く覆い隠し、その嘘で成り立つ歪な偽装社会で、支配・所有欲の拡大再生産を続ける。

知らない(知らなかった)ことを理由には出来ない。知りたくない自分に力を与えてはならない。人間は、知る知らないの次元に居座ることを不可能とし、それ以前の、普通に知り得ることのその原因を変化・成長させることをあたり前とする。そうではないところに居た自分から、少しでも人間らしい自分となるために、直ぐにでも LED 照明を外す。人間であれば、そのことに躊躇する時間は要らない。

この地球に、一生命として生きているということ。自然界に生かされ、自然界を生かす、人間であるということ。そこから離れたままの人間時間が、この地球には在ってはならない。地球の一部となる生を生きる人間は、それを阻もうとする LED 照明の原因をそのままには出来ない。人間であれば、すべきことをする。そして、生き直しをする。(by 無有 4/05 2018)

etc.)だけで生きる。平和も健康も、その原因を内に持たないから、そこへと向かい、そのための知識を手にし、何も変わらなくても、それで満足する。

地球自然界の安心の原因を備える人間は、そのための何かを必要とはせず、ただその原因をそのまま具現化するだけの生を基本とする。そこに、LED 照明の原因が入り込むことは出来ない。そうではない反自然的な人間は、自然界の安心の原因が内に無いからこそ融合し得る、腐敗・停滞型の形を求め、それゆえ、自分たちと同質のLED照明の存在を肯定する。前者は、この地球に生きる、普通の人間である。後者は、なぜこの地球に居るのだろうと、自然界が煙たがる、どこまでも人間本来からかけ離れた、人間もどきである。(その背景となる原因の出来事は、「歴史の芯」の中に在る)

8.人間の思考レベルでは正しいことであっても、自然界に生きる生命たちの立場から観た時にそれがそうでなければ、それは、人間の思考の質が低次であることを意味する。人間的に良しとされることであっても、それが望むべく未来に繋がらない期間限定の要素を含むものである時、それは、修正・浄化されるべきこととして、その質を変える必要がある。それが、LED 照明という、その原因から浄化すべき、低次の存在である。

人間の欲から始まり、負の連鎖の塊と化す LED 照明は、非人間的な負の原因を増大させつつ、自然界を破壊する。そ

欺瞞が力を付ける。

人のためになることに特別な嬉しさを覚える時、そこには、それを普通とはしない異常さを内に秘める、本当は人のためではなく自分のためだけに生きる(人を利用して自己満足を手にする)狡賢い自分が居る。人のためになることが尊ばれる時、そこには、困った人がいつまでも無くならないその重たい原因を備える人によってその行為が悪用されている現実がある。‘人のために’という言葉的思考から外す。それは、人間らしい人間でいるための、生きる基本形のひとつである。

ありのままにいる自分をそのまま表現すること無しに、人のためになる自分を生きることはあり得ない。つまり、自分に正直でいて、考えるまでもなく想い(心)がそのまま形になる自分でいれば、何をしても、どこへ行っても、その気もなく、それが人のためになるということ。そこでは、当然、経験(記憶)から自由でいることがあたり前となり、結果(過去)に付き合う自分も居ない。不安も怖れも居場所を持たず、不健全も不公正も、その原因とは無縁である。それゆえ、何でもない言葉や行為が、人の原因を動かす。

人のためになることは、一切知らなくてもいい。それよりも、人間の本来を自由に生きること。真の普通を、心身に馴染ませること。そのことで、‘人のために’の言葉が存在意義を持ち得てしまうその原因でもある困った人(事)の姿が変わる。人間は、ただ人間を普通に生きる。難しいことは、何も無い。(by 無有 3/25 2018)

人間（2）

1.人間を生きるというのは、地球に住む一生命としての人間の分(役割、責任)を生きること。そのための何かをするという次元を離れ、ただそうである自分をありのままに実践すること。それは、この先、どんな時代を過ごすことになっても、普通にすべきこととして、人間の基本に在り続ける。そのための全てが、そうであるべくその普通の中に溶ける。

その普通が普通ではなくなってしまったこれまでの時を、その自覚もなく支えて来たことを知れば、「歴史の芯」と「仏陀の心」を自分と重ね、人間が大切にすべきことをあたり前に大切にしているその本来の時を創り続ける。そして、要らないものを外し、無くてもいい経験から自由でいて、心の芯となる部分を地球感覚のそれにする。

心の意思を抑え込まれるようにして被った、永い間どうにも出来なかった、厚く、硬い病みの殻が、無有日記のこれまでを通して、ひび割れを生じさせる。そしてこの「人間」で、それを一気に砕き、核(芯)を元気にする。その時、人間は、この地球で他の生命たちと共に地球を生きる、本当の人間になる。思考の次元は、他を余裕で包み込み、脳の原因の働きは、地球自然界の意思を自然に形にする。それはまさに、地球分の一人の人間時間。そのままそれは、地球の姿となる。

せていない人間が、内に潜めた非人間性を基とする思考を働かせて形にしたのが、LED 照明である。事実から学べないというのは、良し悪しの基準が、次に繋がる原因ではなく、思考(知識)に留まる結果であるということ。それゆえ、LEDの負の事実を目にしても(見せられても)、その思考の域からは出ず、そのことを正当化するために、事実を無かったこととして、力ある結果(過去)に無意識に逃げ隠れる。地球自然界を守るという観点からだと、完全な犯罪となる LED 化も、事実から学べない人間の、その非人間的な本質(本性)によって、ここまで存続してしまう。

7.この地球に居て、共に生命を生きるという、基本的な責任感覚を持たない人間がいる。彼らの特徴は、人間だけに通用させてしまう、反自然的な不自然な生き方を普通とするところにあるが、生命を生きる人間として知るべきことも、全く知らないで生きる。

生命として‘知る’というのは、自分の中に、その原因となる要素が在るということ。それゆえ、知るまでもないことは、あたり前に縁遠く、隔たりや争いを生み出す原因は、知らない。知ることは、知ろうとする次元を余裕で包み込むようにして、内なる質として溶けている。

その基本となる感性を無くし、それを良しとして生きる人間は、地球に生きる一生命である自分であれば当然備えるべきものを持たず、無くてもいい否定的な感情(差別、支配、怯え

の原因(本質)は非人間ということになる。

LED 汚染により、物が溶けて変色・劣化し、建造物や道路までが亀裂やへこみを生じさせて沈下するというその姿を放って置くこと自体、人の世には有ってはならない。それでもLED 照明が在り続けるとすれば、この地球は、人間を生命としては扱わない。LED の負の影響力に無感覚でいる人は、この地球に住んでいることが間違いとなる。

極端な話でも何でもないが、LED 照明を使い続けるその姿は、人間ではないと考えて良い。地球を安心させ、地球を生かすことは、地球に生かされる生命たちの大切な仕事である。LED 照明の使用は、それを拒む意思の現れであり、その存在たちを通して、地球が壊れるということである。地球は、地球を生かす生命たちの住む場所である。

6.人間は、思考が健全であると、その原因(手前)のところから物事を見ることを普通とし、不要に思考を働かせずに、事実からその質を学び、必要に応じてその事実を変える自分をあたり前に生きる。

そうではない時、人間は、思考を忙しくさせて本心を偽り、事実から学ぼうとはしない(学べない)自分をごまかすための知識を溜め込む。それにより、事実の質は放って置かれ、そこに在る負の原因は増大して、無くてもいい経験が作り出されていく。

事実から学ぶという、その人としての基本能力を持ち合わ

2.そこから自ずと見え出すのは、これまでの人間世界における歴史とそこでの出来事は全て、この地球に生きる人間のそれではなかったということ。それはある意味、作り物のボードゲームの中の、気ままな無責任人生。人間的な努力も向上心も皆、そこでの実の無い非人間的な原因を基に在ったことに気づかされる。

地球において決して有ってはならない、人と人が人生(命)を潰し合うという異常な経験。そして、その上で異様に繰り広げられる、地球を生かすことを放棄した、人間だけの、人間世界の在り様。この地球で生きる人間としての資質(基本)を備えていれば、人は、これまでのその不自然極まりない人間時間の怖ろしさと未熟さを知る。それは、ここに至る人間の歴史において、その何処にも一生命としての人間は居なかったということ。形ばかりの愚かな人間は、地球に居ることを無視し、地球感覚も一切無いまま、自然界(動植物たち)との融合を外して、異生命を生きる。

自分が地球人であることを否定する人はいない。地球人であれば、地球を大切にすることの意味を、どんな人も知る。そして、そうであれば、人が人の命(人生)を奪うことなど絶対にあってはならないことを自覚する。争いも衝突も、理由の要らない平和と健康の原因で無くてもいいものとする意思を確かにする。ふと気づけば、地球という言葉が身近になる。人間は、自分たちが作り上げた世界ではなく、自分たちを生かす地球の一部になることで、地球人(生命)としての人間を生きる。

3. 永いこと人間ではない人間世界が連ねられてきたその原因については、「歴史の芯」に書いてきているが、まずは、その内実を知る。そして、その上で変わり得たこと、新たに経験できたことを経て、それでも変わらない部分のその原因を自らの中に観る。「仏陀の心」にも触れ、その中身の性質を可能な限り把握し、それへの異物感を明らかにする。

それだけでも、これまでとは違う自分に出会えるが、形ある現実のその質を、力強く、余裕で浄化するために、知り得たことを、体験的知識の域へと成長させる。その時、ムリの無い普通感覚での実践と、一切の気負いの無い真剣さが鍵となる。人間らしく人間を生きることによるそこでの厳しさは、そのどれもが、地球自然界の安心と喜びである。

地球の安心は、そのままそこに生きる生命たちの本来の姿を支え、守り続ける。当然そこには人間も居て、他と同じように普通自然体で生きるその姿が、地球を支え、守ることになる。地球を生かすことで、生かされ、それを普通とすることで、普通に地球感覚を表現する生命たち。その意識もなくそうである生き方を、人間もあたり前に実践する。

4. その普通を普通とする暮らしの中で、人間誰もが地球のために直ぐにでも対処すべき事柄が、LED 照明による災いの回避である。「歴史の芯」を中心に随所でそのことについては述べてきているが、LED 化以降の、そのことによる自然環境の変貌振りは、生命たちにとってあり得ない恐怖となる。非人間

的な生を普通とする人間の、その無感覚と無責任の負の原因がそのまま乗る、LED 照明。地球にとってこれ以上の哀しみは無いその無生命化の威力は、形ばかりの(人間ではない)人間がその本性を暴走させてしまったことによる、地球規模の悲劇である。

動物たちに食べてもらうことでその貴い役を果たす植物たちの意思是、LED によりその力を無くし、地球の一部としての生を表現できなくなる。それでも植物を摂り込み、生命力を保持しようとする動物たちは、小動物を中心に次第に気力を奪われ、地球感覚を無くす。LED の無生命化の負の原因により、地球に生きる生命たちにとって最も重要な微生物の世界での彼らの生も潰されていく。その様は、この地球が経験したくはなかった、それまでには無かった生命たちの姿である。

それがこの時代の人間発の出来事であるわけだから、地球の一部のようにして生きる普通自然体の人間にとっては、この上ない苦しみである。その恐ろしく悲惨な、地球環境の変わり様。そのことを外して(無視して)、人間が人間でいることはあり得ない。LED 照明の存在をそのままにし得ることは、この地球の生命の歴史において、有ってはならないことである。

5. 人間が人間としての生を普通とする時、水や土の生命本来を破壊し、木々を腐らせる LED 照明を使用することは考えられない。もし、そうであるとすれば、それは、その人の全てが嘘であることを意味する。脳や心臓が人間のそれであっても、そ